

信念に生きよ

藤原是祥

人生は無上である。一度生を受けたる者は、其の間幾多の曲折あり、又不慮の災難が其の行手に待つてゐる。故に自己の主義主張を貫徹し何事かを成さんとするには、熱烈なる意氣と勇猛心が無ければならぬ。其の根底は深遠にして確固たる信念によつて生ずる結果である。

大聖人の御書を拜するに、

さいわいなるかな法華經の爲に身を捨てん事よ、此の臭き頭をはなたれば、砂いさごに金こがねを換へ石に珠たまをあきなへるが如し等云（種々節振舞御書）

と、仰せられて、釋尊の本懐たる法華經の爲に自己の身命を抛つ事、鴻毛よりも輕しと思召され、又鎌倉小町の街頭に奮然として立つて、猛り立つ獅子の如く、念佛無間禪天魔真言亡國律國賊と、かの有名なる四個の格言を以て、諸宗を折伏せられたる其の氣慨、道の爲に、法の爲に、一切衆生の爲に一身を犠牲にして、凡ゆる迫害を蒙り乍らも泰然自若として、主義を一貫せられたるは即ち鞏固たる信念の賜である

吁、偉大なるかな、大聖人の其の僅か六十年の御生涯を偲び奉れば實に、血と涙を以て、末法濁世の大海に迷溺せんとする我等一切衆生を救はんが爲に、解脱せしめんが爲に、我不愛身命但惜無上道忍難弘教に専心せられたのである。

最第一たる法華經を以て所依の經典となし給ひ、靈山會上に於て久成釋迦牟尼佛に、別して法華經

を末法に弘むべし、と付囑せられたる上行菩薩の再誕は、即ち我日蓮なり、との大自覺即ち大信念に外ならぬ。

建長五年四月二十八日清澄山上旭ヶ森に開宗宣言せられてより以來、至る處に大獅子吼を以て、是れが破邪反正に努力せられ、其の肺腑より逆り出する處の言々句々、一として、他宗の僧俗をして恐懼措く所を知らざらしめずにはおかなかつた。

當時の執權職北條氏の壓迫、憎惡是れが爲に加はり、諸宗の迫害いや増して、或る時は首の座に、或は伊豆の俎岩の上に、或は佐渡の孤島へ、又或る時は地頭の劔の下等刀杖瓦石の大難小難數知れず擯出したが、堅忍不拔の誠見巖然として微動だも爲し得ず、愈々其の信念の堅き事大磐石の如くであつた。

大聖人滅後、其の遺教を繼承して、名僧智識多く輩出し大法弘通に従事せしが、その迫害甚だしく殉教者も亦多く出た。是等の人々は法華經の爲に身命を犠牲にせしが、其の名は永く我等の龜鑑となつたのである。

我等本化の門下として、其の教理教學の蘊奥を極めるよりは寧ろ堅壘の如き信念に依つて、五字七字の首題を根本として、以て弘教傳道に心掛けねばならぬ。

明治維新に於ける排佛毀釋起りて已來、佛教々團は周章狼狽し、大いに其の惡弊を改め謹慎したが、近年漸やく其の影薄く、又復反宗教運動勃發し其の餘波は今尚ほ全國に及んでゐる。是の如く宗教界は戦々恐々としてゐる。此の時に當り我等は一大信念の本に佛教即ち末法獨妙の法華經の、如何に偉大なる價值あり得益多きを世上に標示すべく大いに活躍傳道に従事すべきの時期である。